

リヴォドーという詩人

——ベローの友人?——

相 田 淑 子

はじめに

今から20年ほど前、パリ・ソルボンヌ大学ソーニエ・センター主催のルネサンス学会の昼食時に、ある年配の研究者と偶然に同じテーブルになった。筆者が「ベローのベルジュリ」を研究していると話すと、その学者は「リヴォドーという私の故郷の詩人はベローの友人です。だから私たちにも友愛を (A notre amitié!)」と言ってワイングラスを傾けてくださった。リヴォドーという名前さえ知らなかった私は、偶然に交わされた言葉の意味するところを確かめようとした。確かにフランスのルネサンス期はピエール・ド・ロンサール (Pierre de Ronsard, 1524-1585) のプレイヤード派やモーリス・セーヴ (Maurice Scève, 1500?-1560?) のリヨン派を筆頭に多くの詩人を輩出している。しかし手近にあったベロー関係の資料にリヴォドーという名を載せた研究書はなかった。当時の図書館目録や複数の専門書のインデックスではリヴォドーの名は簡単に見つけられなかった。リヴォドーへの言及さえほとんど発見できず、ベローとの友人関係どころではなかった。あの昼食時に交わされた言葉の真否が判明しないまま時が過ぎた。ところが2020年からのコロナ禍の非常事態宣言や自粛要請の影響で外出もままならない状況に置かれると、リヴォドーという名前が

記憶から甦ってきた。日本ではリヴォドーを主に扱った論考はまだ存在しない。しかし今度はコンピュータを頼りに調べ直す作業が功を奏した。本稿ではアンドレ・ド・リヴォドー (André de Rivaudeau, 1540 頃 -1580) の詩作品を中心に筆者が長年関心を抱いてきたレミー・ベロー (Remy [Rémi] Belleau, 1527 (8?) -1577. 3. 6) との関わりについて微力ながら言及を試みたい¹⁾。

I. リヴォドーとは誰か

1. リヴォドー研究の現状

古代哲学分野では、エピクテトスの翻訳者としてアンドレ・ド・リヴォドーは一定の名を留めている²⁾。また近年この翻訳や演劇研究ではほんの数行だが、リヴォドーに触れる文献が日本でも出現している³⁾。だが詩人としてのアンドレは知名度が高いとは言い難い。例えば日本のフランス文学史に類した書籍でその名前が出ることはまずない。日本フランス語フランス文学会編の『フランス文学辞典』は 1000 頁を超える百科事典のような大型 2 段組の辞典で 20 世紀前半までの作家は網羅する体裁だが、そこにリヴォドーの名はない⁴⁾。

海外でも詩人としてはあまり関心を向けられていない。日本の江戸時代

1) リヴォドー研究のきっかけを与えてくださったソーニエ・センターの諸先生方に感謝します。

2) André de Rivaudeau, *La traduction française du manuel d'Épictète d'André de Rivaudeau au XVIe siècle*, éd. par Léontine Zanta, 1914.

3) 例えば以下の文献等：柳光子「ラシーヌの宗教劇における人物設定」『フランス文学集』九州フランス文学会、1991 年 45 頁。小倉博孝「詩的喚起と悲劇性：テオドール・ド・ベーズ作『犠牲を捧げるアブラアム』(1550) の場合」『上智大学仏語・仏文学論集 (36)』上智大学仏文学科 2001 年、その他高橋薫の論考等でその名の掲載を見ることができる。

4) 日本フランス語フランス文学会編『フランス文学辞典』白水社 1974 年。

(1859年)に校訂本がパリで出版されたが、現在でもこれが原典テキストとして使用される状況である。この校訂本はリヴォドーが1566年に出版した『アンドレ・ド・リヴォドー作品集 *Les œuvres d'André de Rivaudeau*』を、シャルル・ムーラン・ド・スールドヴァル (Charles Mourain de Sourdeval, 1800-1879) が『アンドレ・ド・リヴォドー詩集成 *Les œuvres poétiques d'André de Rivaudeau*』(以下『詩集成 (1859)』と略記)として編集した書籍である。確かに古い校訂本ではあるが、リヴォドーの詩作品を収録した書籍であり、リヴォドーの生涯についての解説もある⁵⁾。20世紀半ばにこれがリプリントの形で再版され、さらに21世紀になるとデジタル化のおかげで、この『詩集成 (1859)』が複数の機関から公開された。その結果、目を疑うような数の「リヴォドー全集」や「リヴォドー作品集」の類がオンライン上で検索されるのだが、見かけが違っただけで、中身は同じスールドヴァルの『詩集成 (1859)』である。

アンソロジーの分野では、1965年のモーリス・アレムがガルニエ・フラマリオンシリーズの中で、詩人のごく簡単な紹介と一編の詩を紹介しているが、これが唯一と言っても過言ではなく、2014年には同社から電子ブックとして新刊と見紛う外観で再版されている⁶⁾。

さらにデジタル化のおかげでオンラインを利用し、リヴォドーの詩もアトランダムに公開することが容易になったが、16世紀の他の詩人たちに比べればその数ははるかに少ない。

演劇作品については20世紀に校訂本や幾つか論考が生み出された。特にケース・キャメロンの『アマン』の校訂本には、詩人の生涯について

5) André de Rivaudeau, *Les œuvres poétiques d'André de Rivaudeau*, éd. par C. de Mourain Sourdeval, Paris, 1859 (Slatkine reprints, 1968), p. 1-35.

6) *Anthologie poétique française du XVI^e siècle, Tome II, Poèmes choisis*, éd. par Maurice Allem, Garnier-Flammarion, p. 178-181.

スルドヴァルの研究を踏まえたさらなる考察が含まれている⁷⁾。21世紀、演劇関係、哲学関連のシンポジウムでリヴォドーについて言及されることも少なくないようである⁸⁾。

こうして見ていくと、確かに詩人リヴォドーの側面よりも劇作家リヴォドーの側面が研究対象とされるケースが多いようであるが、20世紀中頃にロンサル研究の範囲で詩人リヴォドーが取り上げられる複数のケースがあった。例えばアンリ・シャマル、マルセル・レーモン等の20世紀の巨匠的研究者からの言及である⁹⁾。ロンサルへの反駁の詩篇の中には、アンドレ・リヴォドーからの引用も複数あるが、これらの詩篇は専ら詩人ロンサルへの反駁の一例として扱われたに過ぎない。

またリヴォドーという詩人がロンサルのごく初期の作品集に巻頭詩(poème liminaire)のソネットを献呈しているが、これはアンドレではなく父ロバールの作であり、こちらも混同されてはならない。

本稿の主題であるペローとの関わりについては不明な部分が多いのだが、唯一と考えられる詩作品として、1566年の『アンドレ・ド・リヴォドー作品集 *Les Œuvres d'André de Rivaudeau*』に含まれる1篇、「レミー・

7) André de Rivaudeau, *Aman*, éd. et commenté par Keith Cameron, Droz, 1969.

8) Mariangela Miotti, « André de Rivaudeau : théâtre et poésie pour la cour de Jeanne d'Albret », dans *Jeanne d'Albret et sa cour*, Classiques Garnier, 2004, p. 317-339.

あるいは古代哲学関連では : Damon DiMauro, « André de Rivaudeau et la Bible Author (s) » dans *Bulletin de la Société de l'Histoire du Protestantisme Français (1903-2015)*, Droz, 1995, Vol. 141, p. 207-220. Annick MacAskill, « Esther: Étude du stoïcisme féminin chez André de Rivaudeau », dans *Congrès de la Fédération canadienne des sciences humaines*, Université d'Ottawa, 30 mai - 5 juin 2015.

9) 以下の代表作を挙げる事ができる : Henri Chamard, *Histoire de la Pléiade, I-IV*, Didier, 1939. Marcel Raymond, *L'Influence de Ronsard sur la poésie française : 1550-1585 : Nouvelle édition*, Librairie Droz, 1965.

ベローへの書簡詩 *Epistre à Remy Belleau*』と題された詩を本稿の後半で取り上げる。

16世紀フランス文学に特化したソーニエの『16世紀文学史』、さらにプレイヤード派にテーマを絞ったベランジェの『プレイヤード派の詩人たち』でも、リヴォドーの名は見当たらない¹⁰⁾。さらに今世紀に完結した全6巻の『レミー・ベロー全集』は重要な論考も多数含むが、それでもリヴォドーへの言及はなく、電子化されたこの全集の固有名詞インデックスにもリヴォドーの名はなかった。つまりこの詩の存在自体、ベロー研究では今まで触れられることもなかった。

そもそもリヴォドーとは誰なのか。450年前の詩人の生涯を辿ることは簡単ではない。特に幼少期については推測、仮説の域を出ない矛盾した説が複数存在している。しかしリヴォドーの作品を理解するためには、その時代背景や著者の生涯を辿る作業も無益ではないと考える。以下ではリヴォドーの生涯について少し言及する¹¹⁾。

2. リヴォドーの生涯：父子の軌跡から

バ＝ポワトゥー (Bas-Poitou) という場所

詩人アンドレは1538-40年の頃にバ＝ポワトゥー（低地ポワトゥー）に生まれた。

海岸や湿地帯を有し独自の自然環境に恵まれた場所であるポワトゥー地方はフランスの西部のポワチエを中心とする地域で、ナントとボルドーの間の広範な領域を占めた。行政上の地域圏の再編成により「ポワトゥー」の名称は地域圏名称から失われたが（2016年）、現在のヴェンデ県、ドゥ

10) Yvonne Bellenger, *La Pléiade*, Puf, 1978.

11) 生涯について参考にしたのは主に以下の著書：C. de Mourain Sourdeval, *op. cit.*, p. 1-35. Leontine Zanta, *op. cit.*, p. 68-71.

=セーヴル県、ヴィエンヌ県、シャラント県に及ぶ広範な領域であった。かつてポワトゥーの一部だったバ=ポワトゥーは、主にヴァンデ県にあたり、観光案内にリヴォドーの名を掲げ、通りの名称とする自治体もある¹²⁾。確かに19世紀の郷土研究によって、当時の地方誌にはリヴォドーの名が散見される¹³⁾。

詩人アンドレが生まれた（とされる）フォントネー=ル=コント（Fontenay-le-Comte）はバ=ポワトゥーの中心地でルネサンス時代に全盛を誇った街である。海路、陸路から来る商人たちで賑わい、異国の商人を交えた王室公認の市も開かれていたと言う。大西洋沿岸から近いために、イギリス、ブルトン、オランダ、バスクとの交流は盛んであったが、同時に新教プロテスタントの影響を多方面から受けやすい場所でもあったようで、アンドレはカルヴァン派の影響を直に受けている¹⁴⁾。バ=ポワトゥーは17世紀のユグノー戦争でユグノー派が多数を占める地域となったのは周知の事実であるが、16世紀後半、度重なる宗教戦争下で宗教的な弾圧や抑圧、さらには住民間の軋轢も想像に難くない。

リヴォドー（Rivaudeau）とド・リヴォドー（De Rivaudeau）

アンドレの父ロベールは、フォントネー=ル=コントから近いボヴォワール=シュール・メール（Beauvoir-sur-Mer）で生まれている。カルヴァン派の拠点ともされる場所だが、ロベールは法律を学び行政職に就き、やがてこの地を離れることになる。母のマリ・ティラコーは優れた法

12) ヴァンデ県の自治体の一つシャトヌーフ（Châteauneuf）は、アンドレがこの地域でほとんど全ての著作を行なったと案内書に記載。役場の所在はリヴォドー通り5番地（5 Rue Rivaudeau 85710 CHÂTEAUNEUF）。

13) Société d'émulation de la Vendée, *Revue de Bretagne et de Vendée*, 1859. 先述のスルドヴァルの論考でこの成果を再見できる。

14) アンドレに関してはポワチエ大学で交流のあったアルベール・バビノーとの影響をまず挙げることができる。

曹と作家を輩出した名門のティラコー家の出身である。彼女の父アンドレ・ティラコー (André Tiraqueau 1488-1558) はフォントネーの著名な法曹としてラブレールをはじめ当時の文人とも交流があり、国王フランソワ 1 世からパリ議会で招かれている。ロベール・リヴォドーもマリとの結婚 (1537 年頃) を機に、義父や義兄に導かれる形で故郷のパ＝ポワトゥーを離れパリに出た。おそらくアンドレ誕生の頃と重なると思われる。祖父と同じ名を付けられたアンドレは、7 人兄弟 (一説には 11 人兄弟) の長男で、多くの弟妹たちの中には夭折した者もいたかも知れないが、皆がそこそこの出世を遂げたようで、ティラコー家との姻戚関係の恩恵があったと推測される¹⁵⁾。

しかし父ロベールは公職で苦労を重ねたようで、息子アンドレのポワチエの友人アルベール・バビノーの『ラ・クリスチアード』には、前途有望な若者リヴォドーへの応援に溢れた韻文の一節がある：

幸せて偉大なりヴォドーよ、
偉大なギヨティエールの偉大な息子よ、
偉大なティラコーの甥よ、
先祖に恵まれ、
君の父はある公爵との間の信頼をかつて失ったが、
あらゆる王たちの中で最も偉大なアンリとの間に信頼を勝ち取った¹⁶⁾。(下線筆者)

15) C. de Mourain Sourdeval, *op. cit.*, p. 24.

16) *La Christiade d'Albert Babinot, Poitevin*, A Poitiers, pour Pierre et Jan Moines frères, 1559, cité par Keith Cameron, « Introduction » dans *Aman*, éd. cit., Droz, 1969, p. 14.

友人の父ロベールの職場での浮き沈みの様子が伝わってくる。王侯貴族からの寵愛や憎悪の影響を過分に受けるのが当時の公職の宿命である。上記の引用の最後にある「偉大なアンリ」は国王アンリ2世で、その寵愛は父リヴォドーを貴族に押し上げた。アンリ2世付きの侍従となり爵位を受け、ロベール・リヴォドーはロベール・ド・リヴォドーとなった。父が爵位を受けることで、一家も「ド・リヴォドー」という貴族になる。王の側近として翻訳や詩作も行なっているので、父ロベールにも著作が複数ある。その肩書きは「ギヨティエールとグロワザルディエールの領主にしてアンリ2世の王室付侍従」である¹⁷⁾。前述のロンサール詩集へ献呈された詩も、こうした時期に執筆されたと考えられる。しかし1559年のアンリ2世の突然の崩御、庇護者の喪失の打撃は大きかったようで、父ロベールは即座にポワトゥー地方に戻っている。まさに歴史の紆余曲折に弄ばれた公職である。

アンドレ・ド・リヴォドー

息子アンドレについては、比較的早い時期をパリで過ごしポワトゥーに戻ったという説と、ポワチエそしてパリで学んだという説、あるいは生涯ポワトゥー地方を離れなかったという説が混在する。パリで王の侍従職に就いた父親の影響やパリの学寮の滞在記載から考えると、少なくともパリとバ＝ポワトゥーとの往来があったと考えるのが自然である¹⁸⁾。だが父がパリを離れたように、アンドレも比較的早い時期にパリを離れポワトゥー地方に戻り、ポワチエ大学との関わりが大きくなる。フランスは16世紀

17) ローモニエはギヨティエールの領土は大したことなく、また爵位も単なる遊びの延長であると言い、いささか揶揄の混じった記述をしている。Paul Laumonie, *Ronsard, poète lyrique : étude historique et littéraire*, Hachette, 1932, p. 68, note 2.

18) ボンクール学寮に関わる記録をフランス国立図書館所蔵の *Procez verbal du 31 aoust 1637* に見ることができる。

後半の宗教戦争に向かうわけだが、パリを離れポワトゥー地域が終のすみかとなった時点で、リヴォドー父子はこの土地の主流であるプロテスタントを受け入れることが当然だったと思われる。

問題となるベローとの関係について地理的に考えてみると、ベローがボンクール学寮で過ごした事実とリヴォドーも同じボンクール学寮に入居者として名を残していることから、これが両者の接点となりうると考えられる。当時のパリ学寮の学生たち、ロンサルやジョワシャン・デュ・ベレー (Joachim Du Bellay, 1522?-1560) 等々との交流も推測される。しかし具体的な年代が確定できない。ベローとリヴォドーの年齢差は10歳以上であり、リヴォドーがその当時の彼らと交流するには年齢が足りないようにも見える。そもそも生年が明確ではないので限定的なことは言えないのだが、ベローとの交流をごく幼少期に見ることも不可能ではない。というのは「レミー・ベローへの書簡詩」の中で詩人アンドレは「幼年時代」や「若い頃」への言及を重ね、極めて若い時代を知っている相手に向けて作詩したように思われるからである。パリで知り合ったことを前提にしているのであろうか。いずれにしても、筆者の想像の域にとどまる。

それと比較すると、卓越した教師を招聘し優れた教育を行っていた当時のポワチエ大学を背景に、師であり友とも言われるアルベール・バビノー (Albert Babinot, 1516?-1569?) との交流関係は確かなものである。1559年以降、互いの著作で献呈の詩をやり取りし、先に引用した父ロベールに言及した詩からも分かるように、相手の状況を熟知した親密さがある。この関係と比較すると、アンドレとベローとの交流関係は異なると言わざるを得ない。

アンリ2世の崩御と共にパリを離れた父ロベールは、1567年に故郷に近いフォントネーで首長に任命されている。ちょうどアンドレが『アンドレ・ド・リヴォドー作品集』を発表した翌年である。

1579年に7人の子供を残し父は他界する。アンドレは父の後を継いでグロワザルディエールの領主となることもなく、父の死の翌年（1580年）この世を去っている。同じアンドレという名の息子とデボラという娘を残したという¹⁹⁾。フォントネーは宗教戦争の激しいバ＝ボワトゥーでも比較的安全な場所として知られているが、何があったのであろうか。詳細は不明のままであるが、40歳そこそこの夭折であった。

アンリ2世の執務管理に関わり宮廷という職場で苦勞した父ロベール、主流の詩壇から物理的には距離をとりながらも、常にそこに意識を向けた詩作を続けた息子アンドレ。アンドレの詩には時に激しい敵意を詩壇に向けたものもあるが、劇作や古典研究や翻訳にも挑んだ²⁰⁾。故郷とパリの移動によって、中央の政治から離れた父、中央の詩壇から距離をとった息子、父子の生き方には一見パラレルにも見える所がある。アンドレにとって父こそが一番の庇護者だったのだろうか。父ロベールにも著作が幾つか確認されているのでこれからの研究も期待される。

Ⅱ. アンドレ・ド・リヴォドーの著作：詩作品

1. 『アンドレ・ド・リヴォドー作品集』について

アンドレ・ド・リヴォドーの著作は、主に詩、演劇、翻訳の3分野に分けられる。1566年にリヴォドーが出版した『アンドレ・ド・リヴォドー作品集』（以下『作品集（1566）』と略記）には、演劇作品と詩作品とが含まれている。この『作品集（1566）』以前にリヴォドーの著作であると確認されている詩作品は以下の2点である。

19) C. de Mourain Sourdeval, *op. cit.*, p. 23.

20) 劇作品は『アマン』（1561年上演）を翻訳は『エピクテトス提要』（*La doctrine d'Epictete Stoicien*, A Poitiers, Enguillbert de Marnef, 1567）を代表作に挙げることができる。

—— 1559年 「アンドレ・ド・リヴォドーからオノラ・プレヴォーへ」
(アルベール・バビノー著『ラ・クリスティアード』収録²¹⁾)

—— 1563年 「『当代の悲惨』のピエール・ド・ロンサールの論説詩に
ついて王母への忠告²²⁾」

上記1559年の詩は、ポワトゥーの領主オノラ・プレヴォー (Honorat Prévost) に献呈する形をとって、友人アルベール・バビノーの『ラ・クリスティアード』の出版に際して創作された詩である。「アンドレ・ド・リヴォドーからオノラ・プレヴォーへ」と題された作品は、プロテスタント詩人であるバビノーの真面目さを讃える詩であるためにロンサールの詩句の官能的な部分は特に批判的の的にされている。上記1563年の詩は、『当代の悲惨を論ず』というロンサール作品に対する辛辣な批判である。ロンサール研究の範疇からは、アンリ・シャマルやマルセル・レーモンさらにジャック・ピノー等がこの詩に言及している²³⁾。またこの詩の一部は、今年(2021年)出版されたソルボンヌ大学のオリヴィエ・ミイエ教授退職記念論文集でロンサールとノストラダムスに関わる論考でも引用されている²⁴⁾：

21) Andre de Rivaudeau à Honorast Prevost, gentilhomme poitevin in *La Christiade d'Albert Babinot, Poitevin*, A Poitiers, pour Pierre et Jan Moines frères, 1559.

22) Remonstrance a la Royne mere du Roy sur le discours de Pierre de Ronsard des miseres de ce temps, Nouvellement mis en lumiere, Lyon, François Le Clerc, 1563.

23) 上記の2作の他に、1564年の一作品をリヴォドーの作とする場合もある。匿名の作品集(1565年)の一編である。これを宗教改革やプロテスタント詩人の観点から考察した興味深い論考がある：François Rouget, « Entre éloge et consolation: “Le triomphe de la constance chrestienne à Monseigneur le prince de Condé” (1565) » dans *Bulletin de la Société de l'Histoire du Protestantisme Français (1903-2015)*, Vol. 158, 2012, Droz, p. 509-530.

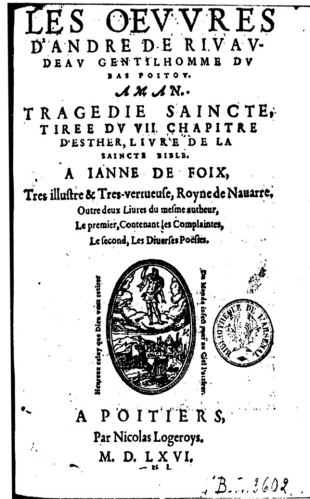
24) Mireille Huchon, « Feux croisés sur Nostradamus : son portrait par Woeriot » dans « *Une honnête curiosité de s'enquérir de toutes choses* » *Mélanges en l'honneur*

お一気のふれたロンサールよ、
君はあの呪われたノストラダムスをあえて受け入れ、
彼の知を認めて、それを真実であると言いながら、
誤ることのない主の神託を否定するというのか？
君はノストラダムスの機嫌をとって
詩人と占い師とは、ほぼ同じ精神を有すと記したのだね²⁵⁾。

1566年にポワチエで出版された一巻本の『作品集』には上記の1559年と1563年の詩作品は含まれていない。その反対に本稿で問題とする「レミー・ベローへの書簡詩」はこの『作品集（1566）』の中でしか確認できない。『作品集（1566）』の全ての詩作品が1565年以前に発表されていないとは断定できないが、少なくとも「レミー・ベローへの書簡詩」はこの中で初めて掲載された可能性が大きい。その理由の一つとして、ロンサールとの関わりで引用されるリヴォドーの詩句は前述のノストラダムスを取り上げた詩句のように極めて辛辣な語彙を含むことが多い。それに対して「レミー・ベローへの書簡詩」には、辛辣な表現はあってもロンサールに対してのものではない。何よりロンサールは称賛の対象となっている。同じ対象（ロンサール）がリヴォドーの中では数年間の間に、軽蔑の対象から称賛の対象に変わった。もちろんリヴォドーが詩の宛先によって内容を変えた、と考えることも不可能ではないが、時の経過が彼の考え方を変えたと思える方が自然のように思われる。具体的には1559年や1663年そして1564年（推定）の詩作から数年後の1566年の6年ほどの間に考え方が変質していったのではないか。その理由を探るのは本稿の主題ではないが、興味をひく問題である。

d'Olivier Millet, de la part de ses élèves, collègues et amis, Droz, 2021, p. 659.

25) *Idem.*



図版 1

さて問題の『作品集 (1566)』は、パリとナントの2冊の所在しか確認できない²⁶⁾。内一冊 (パリのアルスナル図書館蔵) がフランス国立図書館のオンラインサービスで公開されている²⁷⁾。一卷本で「第一の書 le premier livre」と「第二の書 le second livre」から構成され、200 ページほどの書籍である。当時はリヴォドーは20代後半だと推測されるが、この書籍以降、翌年の翻訳書を除くと、詩作品の出版は確認できなかった。唯一というべきこの作品集についてももう少し詳しく見よう (図版1参照)。

表紙は:*Les œuvres d'Andre de Rivaudeau Gentilhomme du Bas Poitou. Aman. Tragedie sainte, tirée du VII chapitre d'Esther, livre de la Sainte Bible. A Janne de Foix, Tres illustre & Tres-vertueuse, Royne de Navarre. Outre deux livres du*

26) 同時期のペローの著作 (例えば *La Bergerie*, 1565 年) はこれと比べると多い。フランスのみならずドイツやロシアにも所在が確認できる (*Universal Short Title Catalogue*)。

27) この1566年出版の一冊は、フランス国立図書館がマイクロ・フィルムから作成した公開資料だが、古い撮影のためなのか判読不可能な部分が多々ある。

mesme auteur, Le premier, Contenant les Complaintes, Le second, Les Diverses Poësies, A Poitiers, Par Nicolas Logeroys, 1566. (『バ=ポワトゥーのアンドレ・ド・リヴォドー氏の作品集、聖書のエステル記7章からの悲劇アマン、高名にして徳高きナバル王妃ジャンヌ・ド・フォワへ。さらに同著者による二つの書、第一の書は嘆きの歌を含み、第二の書は多様な詩を含む』ポワチエにて、ニコラ・ロジュロワによる、1566年)

表紙が示すように「第一の書」は劇作品『アマン』と5編の「嘆きの歌 *Complainte*」を含む。「第一の書」に置かれた演劇作品『アマン』の「前書き *Avant parler*」の前に置かれている詩作品が二つある。一つはバビノーからリヴォドーへの詩である。これは20数行のちょうど1頁に収まる詩だが、ナヴァール妃ジャンヌへの詩よりも前に置かれている²⁸⁾。

「第二の書 *le second*」全体はフランソワーズ・ド・ローアン (*Françoise de Rohan* : 1540-1591) に捧げる体裁であるが、「多様な詩 (*Diverses Poësies*)」にもそれぞれに宛先がある。上記の原典に目次はないが、例えば「マリ・ティラコーの賛歌 *Hymne de Marie Tiraqueau*」「レミー・ベローへの書簡詩 *Epistre à Remy Belleau*」、「カーサール・ダングランドへ *A Caesarre d'Ingrande*」、「キリスト教詩人バビノーへの書簡詩 *Epistre à Babinot poëte chrestien*」、「法律家フランソワ・バルドナンへ *A François Bardonnin jurisconsulte*」、「後世の人々へ *A la Postérité*」等々、全てに宛先がある。

詩作品は「第一の書」の後半と「第二の書」にまたがって収録されているが、ムーラン・ド・スルドヴァルは、1859年にこの全集をまとめ直し『詩集成 (1859)』の形で出版した。リヴォドーの詩を引用する際に原

28) Albert Babinot, *Aux Muses sur les saintes œuvres d'Andre de Rivaudeau* in éd. cit., 1566, p. I.

典とされることが多いが、この『詩集成（1859）』では前述のバビノーから贈られた詩は違う場所に配置され、詩の題名も『作品集（1566）』とはずれがある。「正確性に欠ける部分がない」とは言い難い」（20世紀の研究者マルセル・レーモンの批判）との指摘もあり、本稿では適宜参照する形にとどめアルスナル図書館蔵の『作品集（1566）』を原文テキストとした。

この『作品集（1566）』「第二の書」で158頁から162頁に印字され110行ほどが「レミー・ベローへの書簡詩 Epistre à Remy Belleau」である。この考察に入る前に、当時の「書簡詩」の意味や定義をまず確認しておきたい。

2. 「レミー・ベローへの書簡詩」を通して

書簡詩というジャンル

書簡詩（*épître*）とは言葉の通り、名あて人が明記された手紙のような詩であるが、その起源に遡ると、紀元前のローマ詩人ローマのホラティウスやオヴィディウスの作品を模範とし、ギリシャ語の *επιστολη*、ラテン語エピスタラから派生した手紙を意味すると言う²⁹⁾。王侯貴族宛の書簡詩から架空の下僕への書簡詩まで多様な名あて人をもつことによって、例えば為政者への陳情から恋人への恨みつらみまで様々な内面の吐露が可能になる。16世紀フランスの書簡詩は10音綴あるいは12音綴に揃えることが前提となった。プレイヤード派以前のクレマン・マロ（1496-1544）の複数の書簡詩が特に有名である³⁰⁾。宛名は必ずしも同時代的な人物とは限らず、文学上の架空の人物である場合もある。こうした書簡詩の特性を

29) *Dictionnaire des Lettres françaises, le XVIIe siècle*, sous la direction de Michel Simonin, Fayard et librairie Général Française, 2001, p. 477.

30) J. Vianey, *Les Épîtres de Marot*, Paris, 1935.

顧みると、とりわけ宗教戦争下のフランスでは、手紙のような形式は政治性、思想性、文学性等々の要素を内容に託しやすい利便性、汎用性の高い文学形式に思われるのだが、「書簡詩」と題された詩作品は16世紀後半にはあまり歓迎されていない。その理由はセビエ（Thomas Sébillet, 1512-1589）の詩論やデュ・ベレーの『フランス語の擁護と顕揚』の記述と無関係ではないようである。

セビエの場合は1548年の『詩的技法』の中で「良いことも悪いことも、喜びも不愉快も、愛も憎しみも」誰かに知ってもらいたいことを伝えるための「便り」と定義し、結果として可能な限り多様性のある主題が可能になるのでエレジーとの境界が曖昧になると言う³¹⁾。こうした漠然とした定義の影響を受ける形で、翌1549年の『フランス語の擁護と顕揚』の中で、プレイヤー派のデュ・ベレーも書簡詩を否定的に定義している。この章は「フランス詩人はどのような詩のジャンルを選択すべきか（第2巻4章）」という極めて直接的な問に答える形であるが、あまり好意的な評価ではない。しかし書簡詩を一つのジャンルとして正式に扱っていることは確かである。

書簡詩に関して、これは我々の平凡な言語を十分に豊かにできるような詩ではない。君にオヴィディウスのようにあるいはホラティウスのように荘厳で深刻なエレジーを模倣して作る気がなければ、書簡詩は身近で内輪のことばかりが率先して書かれる詩になる³²⁾。

31) Thomas Sébillet, *Art poétique français*, éd. par Félix GaiFFE et Francis Goyet, Nizet, 1988, deuxième livre chap. VII, p. 153-154.

32) Quant aux épîtres, ce n'est un poème qui puisse grandement enrichir notre vulgaire, pour ce qu'elles sont volontiers de choses familières et domestiques, si tu ne les voulais faire à l'imitation d'élégies, comme Ovide, ou sentencieuses et graves, comme Horace, (*La Deffence, et illustration de la langue françoise* par

(ジョワシャン・デュ・ベレー『フランス語の擁護と顕揚』第2巻4章)

言い換えれば、書簡詩はフランス語を豊かにする詩ではないので詩作では奨励されないジャンルだが、オヴィディウス、ホラティウスを模範とする場合に限り、例外的に認められるということらしい。

実際にプレイヤード派の多くの詩人は「書簡詩 (épître)」を題名に掲げることがなかった³³⁾。だが当時の作品は宛名を記すことが頻繁に行われ、献呈対象を記さない作品の方が稀であり、手紙のように書くこと自体は自由であった。あえて「書簡詩」を標榜して、詩壇の流れに反旗を掲げる危険を冒す必要もなかったのだろう。デュ・ベレーに「書簡詩」と名付けた作品がないのは当然としても、ベローにも「書簡詩」を冠する詩作品はない。ベローはあえて危険を冒す詩作を（特に晩年は）しない傾向にあった。だがアンドレ・ド・リヴォドーは違った。「書簡詩」を作らないベローに向けて書簡詩を作ったのである。1566年の作品集には「レミー・ベローへの書簡詩」の他にもう一つ「バビノーへの書簡詩」が含まれている³⁴⁾。

「レミー・ベローへの書簡詩」 解題

前述の通り「レミー・ベローへの書簡詩」は、『作品集』の「第二の書」の中で「嘆きの歌」5篇続の後、「多様な詩」の一つとして掲載され、先行する「嘆きの歌」に比べると短い詩作品である。書簡形式であるから「名あて人」が繰り返されるのも不思議ではないのだが、何度も繰り返される「Mon ami Belleau (モナミベロー：僕の友人ベローよ)」の呼びかけ

I.D.B.A., Paris, 1549, ch.4 dans le second livre).

33) ただシロンサルには「書簡詩 (épître)」を冠した題名の作品がある。

34) Andre de Rivaudeau, « Epistre à Babinot poète chrestien » dans les œuvres d'Andre de Rivaudeau, éd. cit., 1566, p. 163-167. この書簡詩では、バビノーへの呼びかけは3回のみで、余分な形容詞がなく「バビノーよ」と書かれるのみ。

は心地よく響く。全体が105行ほどの作品内で、この呼びかけが10回ほど繰り返されている³⁵⁾。

冒頭の出だしはこんな風に始まる。

ベロー君、もっとたおやかな子供時代から、
僕の本性はフランスの詩人たち、
とりわけロンサールの驚異的な素晴らしさを称賛してきた、
詩のプリンス、妬みもなく自らの詩流の第一人者としてね³⁶⁾。

書簡の宛先であるレミー・ベローではなく、ピエール・ド・ロンサールへの讃歌のような書き出しである。先ほどの「おー気のふれたロンサールよ」という詩句とは何という違いだろうか³⁷⁾。その後続く詩句でもロンサールへの賛辞は続く（以下、下線は筆者）：

しかし君たち博学な人々の偉大さがあったから、
無能な集団を僕は軽蔑した。
彼らはほとんど知識もなく益もなく、そして天分もなく、
厚かましくも君たちの名誉を奪おうとする。

35) 名前への呼びかけは、フランス語では親愛の情を表し時に礼儀にも繋がるが、日本語翻訳にはそぐわない場合もある。そのため翻訳者によっては二人称の表現で主語が適宜削除される傾向がある。しかしここではあえて「僕のベロー君」と訳語を当てる。

36) Andre de Rivaudeau, « Epistre à Remy Belleau » dans les œuvres d'Andre de Rivaudeau, éd. cit., 1566, « Belleau, mon naturel, dés ma plus tendre enfance / M'a fait admirateur des Poètes de France, / Et singulièrement du merveilleux Ronsard, / Le Prince, sans envie, & premier de son art. », p. 158.

37) Voir notes 22-23.

ここで繰り返された「君たち votre」という表現によって、ベローとロンサールが一緒に扱われていることを知る。ベローはロンサール詩集の註釈者の一人でもあり、ロンサールを師匠のように仰ぐ詩人であるとみなされているが、プレイヤー派の他のメンバーもおそらくイメージしているのかも知れない。しかし具体的なメンバーの名前は最後まで記されない。そしてリヴォドー自身の置かれていた詩的環境がほのめかされる。

鼻持ちならない人物が、ケルシーの豎琴をヴァンドームの豎琴に
比肩させろなんて、頻繁に僕をせつつんだ。

当然のことながらヴァンドームの豎琴とはヴァンドーム出身のロンサールの詩や詩作方法を示す。一方ケルシー地方とは、クレマン・マロの詩を示唆するとの説や当地出身のオリヴィエ・ド・マニーを示すという説がある。その後に「誇り高い檜の梢を柔な西洋さんざしに喩え」た詩人の例を出したり、「すぐりの木の低さを松の高さに喩え」たりする例を出したりして、特定の詩人たちを揶揄していく。

ある人は、藁葺きの小さな建物を
宮殿の偉大な技巧よりもさらに高く評価するね³⁸⁾。

幾つか出される詩の中での比喻や比較は実例があつての批判だが、当時の読み手はもっと早く気づいたことだろう。かなり多くの例を挙げてからリヴォドーは辛辣にも結論する。

38) *Ibid.*, « Celuy la prise plus un petit Ædifice / Couvert de chaume vieil, que le grand artifice / Des superbes Palais, ... », p. 158-159.

友人ベロー君、僕から見れば、
こんな意見をとるなんて、無知が原因。
ロンサールの知識を推し量ろうとするなんて（色の判らない奴め）、
無知は常に大胆さ。
ベロー君、経験だけが人を謙虚にする
学ある人、立派な人はおしなべて
無知な人よりもずっと慎ましい判断をするよ³⁹⁾。

「友人ベロー君、mon ami Belleau」あるいは「ベロー君、Belleau」と繰り返される呼びかけと、屈託のない表現は、リヴォドーがベローを友として扱い、自分の信じることを言い聞かせているように響く。

そして詩人は呼びかけながら、激昂していく。「芸術家気取りの驕り高ぶった奴ら、ホラ吹きソフィストたち、彼らは大胆で、無謀な嘘つき」と荒々しい言葉が飛び出す。このような言い方は数年前の詩でロンサールに向けて吐き出された雑言に等しい。しかしこの詩では、愚かな人たちがロンサールのような「偉大な人の名誉」を「小さな力で」傷つけてきたのだと説いて、彼らの仕事は少しの間は称賛されるけれど、最後には学ある人達の眉をひそませるのだ、とリヴォドーはまとめる。

そして続く詩句でリヴォドーは自分のことを語り出す。自身が幼少から詩作の厳しさを体験してきたことを吐露し、そこで身につけた技術を少し誇らしげに語る。

再びロンサールの作品、「讃歌 hymne」の称賛となると、そこでは数年

39) *Ibid.*, « Amy Belleau, de moy, la cause, qui fait prendre / Aux hommes cet avis : ou c'est un ignorant / Lequel va de Ronsard le sçavoir mesurant (L'aveugle des couleurs) / Car tousjours l'ignorance / Est hardie, Belleau, la seule experience / Rend l'homme plus modeste, & les doctes & grandz / Sont sobres à juger plus que les ignorans. », p. 159.

前にロンサールの作品を貶し続けていたのとは違う評価がリヴォドーから下される。

僕は思うんだ、ロンサールは最高の古代の人の流儀に従い、
古代の人の手法に触れたのだ。
讃歌においては完璧な詩人のロンサール
知識の総体（百科全般）から真髄を抽出し、
沢山の作品で、古代の人から受け継いだ
はるかに美しい言語を駆使し
僕たちの言語を新しいスタイルにする⁴⁰⁾。

リヴォドーは具体的に様々なジャンルで傑作を編み出すロンサールを讃える：「ベロー君、この壮大な韻律、充実した詩、ピンドロス風のオード…」。ベローを褒めるのではなく、ベロー相手にロンサールの素晴らしさを語り続ける。確かに彼の指摘するロンサールの卓越さは、21世紀の今日でも多くの人々が認めるところであり、この書簡詩で賞賛された内容に異論は無いだろう。しかしリヴォドーはベローの作品には微塵も触れないつもりようだ。リヴォドーの伝えたいのはロンサールの偉大さだけではない。さらに自分の立ち位置の確認作業を彼は続ける。

僕のベロー君、天分と芸術性は僕にはほとんどないけれど、
ロンサールの美徳は分かるよ、

40) *Ibid.*, « Ronsard, à mon avis, a bien suivi le train / Des meilleurs anciens, & touché dans leur main. / Car Poète parfait aux Hymnes il decœuvre / Une encyclopædie & en mainte sienne œuvre, / Et fait nostre langage en un stile nouveau / Passer des anciens le langage plus beau. », p. 160.

神の計らいで、彼は立派すぎるほどの魂や牽引できるだけの頭脳をもっている。

僕にはそんなものは少しもないけど、彼を君の詩の父と認める。

でもね、だからと言って僕は彼の真似をして書かないよ、
それで満足さ⁴¹⁾。

呼びかけはさらに親しさを増して「僕のベロー君 mon Belleau」となる。ベローの「詩の父」がロンサールだと認めるリヴォドーであるが、「猿真似」と言う言葉を使ってロンサールを無駄に真似ることへ嫌悪を表明する。でも「猿真似」は正しい「剽窃」や模倣とは違う。

僕のベロー君、

僕は剽窃物を巧みに模倣する術を心得ている、

君の詩についても同じようにしたいよ：

君たちはそれを嘲笑しないだろう：

作家は役立てることの他に、

何の益を望めるのだろう⁴²⁾？

有益な模倣が大いに歓迎された16世紀において、この詩でリヴォドーが語る内容は、違和感なく受け入れることができたと考えられる。単なる猿

41) *Ibid.*, « J'ay bien peu, mon Belleau, de naturel & d'art, / Neantmoins je cognoy la vertu de Ronsard, / Et n'ay point, Dieu mercy, une ame trop beliere, / Ni un cerveau asnier le recognoissant pere / De vostre Poësie : Et je suis bien content / N'escire jamais rien pour l'imiter pourtant. », p. 160-161.

42) *Ibid.*, « Le mesmes, mon Belleau, de tes vers je veux faire, / Car je sçay mes larcins finement contrefaire : / Vous n'en serez marris : que veulent meriter / Les escrivains sinon qu'ilz puissent profiter ? », p. 161.

真似ではない有益な模倣をするために「君たち（ロンサールとペロー）」の詩がある、というのがリヴォドーの言い分である。しかし続く行では「詩作の技術とフランス語の使用において、ロンサールが僕たちよりも優位にある」、と言う。この「僕たち」という一人称の表現は、リヴォドーとペローとの一種共同体を醸し出しているように響く。ペローの立場は、リヴォドーから見れば「君たち」であり、同時に「僕たち」にもなっている。

「君たち」から「僕たち」の変化は何を意味するのだろうか。リヴォドーの書簡詩が出版された時点で、既にペローはロンサールの作品の註釈者で、註釈付きの恋愛詩集が出版されていた⁴³⁾。ペローはロンサール側の人間、リヴォドーにとっての「君たち」である。だが註釈書の数年後、ペローは散文と韻文からなる物語のような『ベルジュリ（1565年）』に、それまでの自作の詩を適宜按配するだけではなく、ロンサールの作品をそのまま自分の『ベルジュリ』に収録した⁴⁴⁾。これは模倣というよりも剽窃であり、リヴォドーが良いイメージで使用する「剽窃物」と近似である。つまりロンサールに対して、ペローはリヴォドーと同じ側の人間、ロンサールを模倣する立場の人間、「僕たち」になる。「書簡詩」の作者リヴォドーも名あて人ペローも、こうした経緯は織り込み済みであったのであろうか。ペローの作品には具体的に触れないリヴォドーだが、深いところで彼はペローと繋がり「僕たち」となった。もっと正確に言うならば、少なくとも繋がっていることをリヴォドーは発信しているのである。

不思議なことに「僕たち」という表現をリヴォドーが出して以降の詩行に、「ペロー君」という呼びかけは一切現れない。両者は「僕たち」で合

43) *Le Second livre des Amours de P. de Ronsard*, commenté par Remy Belleau, Paris, Buon, 1560.

44) *Voir Pierre de Ronsard, Élégies, mascarades et bergerie*, Paris, Buon, 1565.

体してしまったのだろうか。だからもう呼びかける必要は無いということなのか。しかし書簡だったら最後まで相手を見失うことはなく最後まで相手の名を繰り返すのではないだろうか。しかし「書簡詩」の最後でリヴォドーが呼びかけるのは「あーフランスよ」である。そして「後世の人々に偉大な作品を与えることを望む」と結ぶ。「後世の人々 la postérité」に想いを託すのは、この『作品集』自体が「後世へ A la postérité」と題する作品で終わるのと同様である。こうした詩作はリヴォドーの特徴であるようで興味深い。

急ぎ足で「レミー・ベローへの書簡詩」を眺めてきたが、先述の通り「書簡詩」は16世紀後半、微妙な位置になった。ただしデュ・ベレーの言葉を借りれば「オヴィディウスやホラティウスのような荘厳で深刻なものを真似て作る気」があれば「書簡詩」は許容されるということにもなる⁴⁵⁾。リヴォドーはその自負があって書簡詩に挑んだと思われる点もある。模範とされたホラティウスが讃美したホメロスがこの「書簡詩」に何度も登場する。

ホメロスを不名誉な十字架で鞭打つ人は、
永遠に妬みの一団に名を残す⁴⁶⁾。

おそらく、ピンドロスやホメロスを
僕は少しばかり理解している⁴⁷⁾。

45) Voir note 30.

46) André de Rivaudeau, éd. cit., 1566, « Le fouëtteur d'Homere en une croix honteuse / Donne nom pour jamais à la troupe envieuse. p. 159.

47) *Ibid.* « J'enten, peut estre, un peu de Pindare & d'Homere, », p. 161.

古代風の「書簡詩」というジャンルを意識しているからこそ、古代の人々の固有名詞を詩に散りばめるのか。古代人の詩法をたびたび祖上に載せ、古代への意識が読者に銜学的に響くほどになってもリヴォドーは筆を止めない。

「改詠詩 *palinodie*」という古代ギリシャ・ローマに存在した形式がある。前に詠んだ詩で表明した内容を撤回する頌歌のことである。バビノーの味方をしメラン・ド・サンジュレを称賛し、ロンサールを貶した時期から7-8年後、この詩ではロンサールを称賛する方針転換をする⁴⁸⁾。先述の1559年や1563年で対象（ロンサール）へ表明された見解を完全に撤回した。内容から考えれば1566年のこの書簡詩は紛れもない「改詠詩」である⁴⁹⁾。書簡詩というジャンルを選び改詠詩への意識もあったとしたら、リヴォドーはロンサールを超えて古代へ挑戦するような一面も「かなり大胆に」持ち合わせていることになる。ところが当の詩人は「だからと言って、僕はギリシャ語で大胆に執筆したくはない」と同詩の後半で軽くかわした。

詩人の年齢も考え合わせると、この書簡詩全体は自分の道を模索し後世のフランス詩を背負うという若い詩人の意気込みが伝わってくるような気がする。果たして受取人と想定されているペロー自身はどのようにこの詩を読んだのだろうか。

48) リヴォドーが賛辞を送った宮廷詩人メラン・ド・サンジュレ (Mellin de Saint-Gelais, 1491-1558) の死で、宮廷詩人を引き継いだロンサールへの配慮むしろ忖度と言えるかもしれないが、そのような解釈はロンサールの研究分野に複数ある。

49) マルセル・レーモンによれば、16世紀には改詠詩趣向があったと言われる (Marcel Raymond, *op. cit.*, p. 355)。

Ⅲ. レミー・ベローからの視点

本稿の出発点、リヴォドーとベローとの関係は実際にどのようなようであったのか。ベローは、親や師匠への賛辞を聞かされた息子や弟子よろしく、落手したのだろうか。ベローからの返信に当たる資料は提示できないが、「博学で savant」「優しい gentil」と言われる詩人は言葉のままに淡々と受け入れたのかも知れない⁵⁰⁾。書簡詩の流儀と伝統を踏まえるならば架空のベローを名あて人にもできるから、二人の間に現実的な交流がなかったと仮定することも不可能ではない。信頼をおける（架空の）人物に内面の吐露ができるのは、「書簡詩」というジャンルのメリットである。だが、そこまで「ベロー」を架空の人物とするのも無理がある。というのも、この書簡詩が含まれている『作品集（1566）』が、ベローの手元にあったという事実があるからである。書簡詩の名あて人だったベローは、実際に受取人だったという実証的な資料になると考える。

それはレミー・ベローの遺言書に付随する財産目録で、当時の公証人が作成した文書をもとに論考として戦後に発表された。原本はパリの国立古文書館が管理している。ベローはパリで他界したが、パリのアパルトマンは彼の職場（オート＝マルヌ県のジョワンヴィルのギーズ家）とパリとの往来でも使用され、現在のルーヴル美術館の脇にある聖ロクセロワ教会（L'église Saint-Germain l'Auxerrois）とセーヌ川との間の通りにある⁵¹⁾。

ベローの死期が迫った時、そこに公証人が呼ばれ、遺言書の作成が次のように始まった（括弧内は筆者が加筆）⁵²⁾。

50) 詩の中に現れたこれらの形容詞は、ベローに対し頻繁に使われる付加形容詞、つまり枕詞のようなものである。

51) 現在は観光ホテルになっているが、2014年に筆者が宿泊した際、その場所の来歴は忘却されていた。

52) M. Connat, « Mort et testament de Remy Belleau » dans *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance*, 6, 1945, p. 328-356, Droz.

その日（1577年3月14日）、地元の公証人であるルネ・バリエールとランベール・シャルタンの2名が、瀕死の人（ベロー）の要請を受けて呼び出され、ベッドに横たわっている彼（ベロー）を見た、「体は不調」だが「思考、記憶、理解力は健在」であったとの記載があり、本人（ベロー）の指示により遺言書を作成…⁵³⁾

この資料の後半にベローの財産目録が転記されている。目録の書籍に関してはフランス語、ラテン語、ギリシア語、イタリア語等の順に分類され、比較的上位の記載項目の中に『リヴォドー作品集』が見つかる。原文のまま転記する：

Item, ung livre appellé les *Euvres* de André de Rivaudeau, gentilhomme du Bas Poictou

（品目、バ＝ポワトゥーの貴族アンドレ・ド・リヴォドー『作品集』という一冊の本⁵⁴⁾）

上記の記載は、ベローの遺骸をパリのグラントギュスタン教会に運んだ詩人たちの一人デポルトの書籍の記載の直前に記載されていた。数多くはない書籍目録で目立つ位置だ。出版社の表記はないが、リヴォドーにとって唯一の『作品集（1566）』と考えられる。今日では2冊ほどの所在しか確認ができない本が、パリのベローのアパルトマンにあった。「レミー・ベローへの書簡詩」はこの作品集の中に含まれている。確かに書籍の所有者がその書籍を全て読んでいたと明言することはできないが、自分宛の書簡詩を読まない可能性はとても低いと思う。広いとは言えないベローのア

53) *Ibid.*, p. 332. 公証人バリエールとシャルタンの記述。

54) M. Connat, art. cit., p. 343.

パルトマンに、最期の時まで保管されていた事実は重要である。書籍目録には他にロンサール、バイーフ、デュ・ベレーについては各自一冊以上の著書があったが、決してプレイヤー派に与する詩人の著作が揃っているわけではない。ベローが最期の時を過ごし、2名の公証人が呼ばれたのはパリのアパルトマンであり、そこに『リヴォドー作品集』があった。この事実はベロー側からのリヴォドーとの接点を明示する紛れもない証拠となると考える。

おわりに

今まで詩の分野におけるリヴォドーは、ロンサール研究の視点からロンサール批判者（あるいは敵）として考察されてきたし、ベロー研究からは全6巻の全集に名が出ないほどなおざりにされてきた。今回レミー・ベローとの関わりからリヴォドーの「レミー・ベローへの書簡詩」の考察を試みた。この書簡詩については、ロンサールとの関係修復のための単なる口実に過ぎないとする説も多いが、それほど単純な作品には思われなかった。むしろベローとの信頼関係を想起させる作品、そして若さと精彩を放つような作品に筆者には映った。

いずれにしてもリヴォドーがそれほど軽視される詩人ではないことが多少なりとも伝われば幸いである。次回はこの書簡詩の「友人 ami」の背景を宗教的な観点から取り上げてみたい。